



アメリカと中国（雑感）

アジア経済交流センター顧問 藤野 文悟

1. 世界の動き

2019年が明けた。どのような年となるのだろうか。世界は今、不気味と言ってよい混沌状態にある。アメリカ社会の分断を促すトランプ政権は後半の2年間に入ったが、先行きはだれにも予測出来ない。予測不能の自己中心型だ。欧州はイギリスのEU脱退問題で自信喪失、混乱の極みにあり、フランスのマクロン政権は国民の信を失いつつあり、ドイツのメルケル政権も終焉に近付き、欧州全体にはポピュリズム的右傾の風が強く吹いている。EUが大きな危機に晒されている。中東状況もアメリカのイラン核合意の撤退により更に不安定化し、アメリカの庭の中南米もアメリカはコントロール出来ていない。

世界第三位の経済大国日本も安倍政権に不祥事が相次ぎ、長期政権の疲労の色が濃くなった。アメリカと共に世界の重要な一極を担っている中国の習近平政権もトランプ政権より強い逆風を受けている。結論を急ぐ様だが、英国の産業革命以来、近代化を続けて来た人類の文明が、19世紀パックスブリタニカ、20世紀パックスアメリカーナと続き21世紀に至り、その行き先を見失い、未知の混沌状態に入った予感がする。ロシアとのINF条約破棄など経験則から言えば、何かかつての冷戦時代に逆行する様な印象すら覚える。今年は何か人類にとって大きな節目の年となる予感と恐怖感が混在している。

2. 習近平政権の行方は

トランプ政権の思いつき政治に中国は大きな逆風を受けている。今年の中国はどの様に動くのだ

ろうか。共産党一党独裁に対する批判は多いが、大国中国が安定した環境のなかで持続的発展を保って行く為には核心となる共産党の存在は不可欠と考えられている。やがて百年を迎える共産党が国家の核心たる為には党の改革、反腐敗闘争が必須なのである。共産党が権力を集中し、その上で腐敗し始めれば国民の信を失ない、大国中国は分裂するだろう。その危機感から改革の狙い手として登場したのが習近平である。党の大掃除をやるからには、相当権力を集中しなければならない。毛沢東が建国し、頼小平が経済を発展させ、習近平は党の改革を実行した。第三の男とでも言えようか。反腐敗闘争のすさまじさは言語に絶するが、世論は歓迎している。習近平政権のもう一つの肝は「一帯一路」政策である。これは中国経済の発展を世界各国との相互利益を目指した（人類運命共同体と言っている）陸と海から世界をつなぐ大構想である。二十世紀に実質的に世界を支配して来たアメリカが敏感に反応したのも無理はない。アジアから欧州、中東、アフリカ、更に中南米と新しい秩序を求める大構想であり、アメリカの世界支配に対する挑戦と映ったと考えられても当然かもしれない。この構想は習近平政権の絵にかいた餅と言う説もあるが、これは長期的戦略であり、一両日で結果を求めようとするものではない。

足元の経済は比較的安定に推移している。経済発展の肝は①「中国製造2025」と②国有企業の改革である。何れも国家主導型の改革で全体とのバランスをとりながら一步一步進んで居り、今日明日の成果を急いでいる訳ではない。アメリカの

圧力の影響がないとは言えないが、中国は広大な内陸を有し懐が深い。6.5%の成長でも安定持続ならば充分であり、やがて近い将来その経済力はアメリカに追いつき追いこすことは確実であろう。

3. アメリカは

トランプ政権の行方は誰にも分からない。目先のアメリカはトランプ氏の思い込みで決まる状況だ。ホワイトハウスは一部の極右的人物とトランプ氏村度の人物のみが占拠し、優秀な官僚・政治家はどんどんあきらめ政権を離れた。共和党もアイデンティティを失ってしまった様だ。トランプ氏の堅い支持層と言われる30%強の人々を何時まで引きつけられるか。もし次の大統領選挙で再選される様なことになれば、アメリカは哲学も理念もなく世界のリーダーとしての地位を確実に降りることになるだろう。アメリカの国民はそれを許すのだろうか。世界が多様化へ向うのは、もう避けることの出来ない流れであろうと思うが、アメリカが一定の期間バランスをとることが、新秩序形成へのステップだと思うが。何にせよ、今年は世界の流れを左右する重要な年となるだろう。

4. 米・中関係はどうなるか

米・中摩擦は貿易だけでなく未来の世界秩序形成の争いの様相を呈して来た。中国が「一带一路」政策を打出したからと言って軍事、経済等総合的な国力からしてアメリカに今すぐ対抗する事を考えている訳ではないと思う。トランプ政権、特に内部の極右的思考の人々が過敏に反応しているのではないか。中国の首脳陣はいろいろな議論があったが、当面次の様な対米方針を決めたとされる。21字方針という。「不対抗、不打冷戦、按歩伐開放、国家核心利益不退讓」（対抗と

冷戦を回避し、順を追って開放し、国家の核心利益は譲らない）米・中関係はあらゆる面でお互いに深く関係し合っている、一時的なトランプ政権の圧力にふり廻されない様に慎重に対処しようという方針であり、米中交渉はどこかで折合いをつけ、破局に至ることはないと思われる。但し国家の核心的利益、例えば台湾問題、南シナ海等は譲歩しない。長い歴史のなかで米中が直接闘ったことはない。それだけの人脈と知恵はあると考える。

日本の立場は微妙だ。世界が一極から多極化へ向う流れを阻むことはもう出来ないと考えれば、一極との全依存的同盟のみでは危うい。私は、日本が「一带一路」の終点であり、逆に言えば始発点であると考えている。少し長期的な視点に立って「一带一路」へ協力をすると考えるべきではないか。お互いに裨益する処だからである。本当の戦後レジームの脱却に取り組む時が来ている。今年はいろいろな意味で知恵のある外交力が問われる。国民の意識も。